

「反知性主義」

2014年12月28日

佐藤優氏は「反知性主義」という言葉をしばしば使っている。『東京新聞』の「本音のコラム」で、政治エリートたちの間に反知性主義が蔓延していると下記のように書いている。反知性主義とは「客観性、実証性を軽視もしくは無視して、自分が望むような形で世界を理解する態度」のことである。高等教育を受けた者でも、反知性主義に足をすくわれる。反知性主義者は、アジア・太平洋戦争の無残な敗戦を美化したり、沖縄県民の反対を押し切って辺野古に巨大な米軍基地建設を強行しようとしている。それが、日本の国際的孤立を招き、沖縄の分離傾向を加速させることが視界に入らない。

日本の政治はポピュリズムが基調なので、勇ましい反知性主義者に票が集まる。彼らは反知性主義に自己陶醉し、永田町でグロテスクな政治劇を演じている。外部からの強力な刺激を受けない限り、自己陶醉から抜け出すことはできない。そこで、反知性主義を崩壊させる適切な言葉を小説家、ノンフィクション作家、劇作家などの表現者が見いだすことができれば、事態は改善する。表現者の責任は重いと書いている。同感である。

『闘うための哲学書』を興味深く読んだ。1970年生まれの小川仁志氏と萱野稔人氏の若い二人の哲学者が対話しながら、古今東西の22人の哲学者の思想を紹介している。取り上げ方が面白い。例えば、プラトンの『饗宴』を「愛するとはどういうことか?」、イマヌエル・カントの『永遠の平和のために』を「戦争はなくせるか?」、福沢諭吉の『学問のすすめ』を「なぜわれわれは勉強しなければならないのか?」などと現代人が関心を持つテーマにして語り合っている。ジャン＝ポール・サルトルの『存在と無』を「生きるとはどういうことか?」という問いにしている。

サルトルは世界を席卷した最後の哲学者ではないだろうか。彼の哲学は「実存主義哲学」と言われている。英語では「existentialism」で「existence 存在」を語幹にしている。九鬼周造氏などが「主義」がついているので「存在主義」でなく「実存主義」と訳し変えたそうである。実存主義は投げ出されて存在する人間が周りの環境、社会に関わりながら、自分でどんな人生を切り開いていくかという思想である。自由を追求する思想であるが、そこでは責任を背負っていく側面を持っている。サルトルはフランスの植民地主義や移民問題など、社会に大きな問題を提起し、行動する哲学者であった。『嘔吐』などの作品でノーベル文学賞に選ばれながらも、辞退したことは実存主義の実践であると評された。国王などからの受賞を拒んだのではないか。若者に圧倒的に支持され、私も学生時代、分らないながらも『存在と無』を熱心に読んだ。人間は存在している今の状況を甘受するのではなく、自分を否定して変えようとする、また世界を否定して改変しようとする。その否定を「無」という言葉に概念化した。その時代への関わりを「アンガージュマン」という言葉で表した。「アンガージュマン」に押し出されて「靖国神社国家護持反対」「沖縄返還」「指紋押捺反対」の集会やデモに参加した。

『闘うための哲学書』から、サルトルの思想を思い出し、佐藤氏の言う反知性主義を重ね合わせると、奇妙な現代が浮かび上がってくる。12月の衆議院総選挙は、反知性主義者たちの企みであったが、彼らは「アンガージュマン」させない状況を作り出す策に長けていたと言えよう。若者たちを眠らせて、勝利を勝ち取ったのではないか。眠らずに目覚めて闘ったのは沖縄であった。彼らの受けた傷は大きく、耐え難いと声をあげ、積極的に「アンガージュマン」した。ここから学ぶことは多い。客観性、実証性、そして国際性を凝視して、時代に関わり、闘う思想を持つことが生きるということである。